

中村眞一郎『再讀日本近代文學』 (集英社)

——不在の中の文學——

和田正美*

私が少年時代に本を読み始めた頃の現役作家で未だに文學活動を續けてゐる人はきはめて少ないが、中村眞一郎はその少數の中の一人であり、顧みれば中村氏には随分御世話になつた勘定になる。しかし私は中村氏の自閉的、神経症的な文體と發想が最初からどうしても好きになれず、だから中村氏の愛讀者を以て任じたことは一度もない。が、一方では、中村氏における文學へのひたむきな愛着と頑固なほど筋を通したがる性癖にはそれ相應の敬意を拂はずにはゐられなかつたので、それとこれを合せて言へば、私は中村氏に對して愛憎相半ばすといつた感情を抱き續けて來た。

今日、中村氏はいはゆる戦後派の、もはや數へるほどしかゐない生き残りであり、しかも氏の文學的熱情はその高齢にもかかはらず一向衰へたやうには見えないのであつて、そのことに着目した私がそろそろこの邊で自分の中の中村眞一郎像をもつと明確なものにしたいと畏

敬の念を籠めながら考へてゐた矢先に出會つたのが『再讀近代日本文學』であつた。これは讀み應へのある、啓發的な本である。その點では私が今までに讀んだ中村氏のものの中で最上と言つてよい。しかしそれははつきり認めた上で、尚、私は残念ながら、この讀書が中村氏に對する私の年來の愛憎を深めるだけの結果に終つたことを冒頭から言つておかなければならない。愛を強め、憎を弱めたいといふ願望は空しかつた。

この驚くほど文學的な文學論は不思議にも文學における最も本質的な何かへの洞察を缺いてゐるやうに思はれるのだ。

『再讀近代日本文學』は啓發的であると述べたが、實際、この本の中には(論の當否はともかくとして)様々な卓見が含まれてゐる。一例を挙げると中村氏は森鷗外の長篇小説『灰燼』が未完に終つた理由を次のやうに説いてゐる。

ここに至つて鷗外はやうやく西洋近代作家の場合と同じく創作上のデモンにめぐり合ひ、人間性の地獄の淵に佇んだが、もしそのデモンの力を借りたりすると、作品の完成と引換へに彼の社會生活と家庭生活が崩壊することは避けられず、その危険を察知した鷗外は『灰燼』の世界から身を引いて、より安全な(これはこれで獨創的なものであるが)歴史すなはち史傳といふジャンルに韜晦した……

これは實作者としての經驗に裏付けられた斬新な見解であり、鷗外の愛讀者や研究家がこの指摘をどう受止めるか知りたいやうな氣がする。

中村氏は森鷗外から戦後文學までの様々の作家をヨーロッパ前衛文學の動向に結びつけながら論じたが、その方法の根幹を成すのは、過去を過去として整理するのではなく、過去の文學の中から未來

の文學の可能性を探り出さうとする試みであり、氏はその姿勢において世上の文學研究家の態度を繰返し批判してゐる。研究家は彼等のやり方を變へまいとするのであれば、中村氏の批判を（これは氏自身の要望でもあるのだが）非學問的として斥けるやうなことはしないで、それを敢然と迎へ撃つべきであらう。

私としては中村氏の方法に異議を唱へるつもりはない。「作家は死後も成長する」といふテーゼには全く賛成である。過去の文學が過去の軌から解き放たれて未來の中を生きることを目指した研究をしていけない理由があらうか。問題は中村氏の方法ではなく、それを支へる精神の中にあると言はなければならない。

中村氏の永井荷風論は荷風の文學者としての生涯をフランス文學への親炙、傾倒の観点から解釋し、荷風を日本におけるほとんど唯一のフランス的な作家と見做し、それは過褒ではないかと思はれるほど熱っぽい讚辭を荷風に捧げたものであるが、氏はその論の結びの箇所、荷風を理解するためには彼が讀んだフランスの文學書と漢詩文の類を讀み抜かなければ駄目だといふ意味のことを述べてゐる。

荷風の在り方に深く共感して、「現代の、生きた荷風像の探求」をしようとするのなら、その通りであるのかも知れない。中村氏の主張が從來の、おほむね國文學者の手に成る荷風研究の盲點を鋭く衝いてゐることも事實であらう。しかしいふまでもないことながら私達には、荷風が目を通した書物のリストに接することなく、いはば素手で荷風に立ち向ふことも可能であり、この二つの態度を繋ぐものは、私達にとつて荷風の文學もしくは精神は何故必要かといふ問ひ掛けでなければならぬ筈である。中村氏にはそれが脱落してゐる。これはどうしたのか。かういふ視點を呈示しないで、荷風の讀書の追體驗を

懲憑するのは、量を以て質に代へる愚學といふものではないのか。

中村氏は一流の作家のあかしを、彼がブルーストのやうに前人未踏の文學的新領土を開拓したか否かの中に求めるほどの人であるから、すべて文學者の名に價する文學者が独自の世界觀を持つてゐることは當然認めるであらうが、それらの一つ々々を氏がどう評價するのかといふ肝腎のところは案外よく判らない。たとへば中村氏は二次大戰直後のヨーロッパで流行したサルトルの無神論的實存主義といふ言ひ方を何度かしてゐるが、中村氏とそれの生きた關係を是非訊きたいものである。

サルトルの實存主義は論者の主體を抜きにしては語れない筈などと私が言ひ出せば、文學論は文字通り文學を論じるものであつて論者の世界觀や人間觀を披瀝する場所ではないといふ反論が返つて來るだらうが、すぐれた批評家は何について述べる際にも、自らが懷抱する世界觀と人間觀を、すなはち彼に固有の生き方をそこに偲ばせるのではないだらうか。

中村氏は佐藤春夫の或る小説に「人類史の未來に對する空想」といふ形を取つた「文明批評」を見てゐるが、蓋し佐藤のそれは一箇の文學的技法としての文明批評であり——さういふものにも立派な存在理由があることはことわるまでもないけれど——それを超えるものではなかつた。とはいへ言葉の本來の意味における文明批評が佐藤とその世代の人々になかつたことはおそらく彼等の弱點とまでは言へないであらう。しかし佐藤より幾世代か後の、現代の批評家である中村氏の場合にはさう言つて濟ませるわけには行かないのである。

中村氏には固有の世界觀と人間觀がないとか、氏は文明批評とは無縁の徒であるとか考へてゐるわけではない。私は中村氏に對してそれ

ほど冷たくはない。が、世界と人間を見る中村氏の眼は常に文學を通した眼であり、氏の所論には讀者をのびやかな廣い世界に解放するといった効果がない。中村氏の言ふことがどれだけ正しく見えようと、それを讀んでみると、狭い箱の中に閉じ籠められたやうな息苦しさを感じないではゐられない。

中村氏ほど文學好きな人は珍しいが、氏の文學は自己増殖を續けるだけであり、文學に對立する何かから——必ずしも現實生活からではない——養分を得てその骨格を逞しくすることがないやうに思はれる。

文學においては未だしも聴くに堪へる中村氏の話柄が文學と社會の接點に及ぶ時、それが急に色褪せてしまふことは無理もない。「一八六八年の半革命を経たばかりの半成熟のブルジョワ社會」とか「近代の半封建的非民主的政權下の日本の現實」とかいふやうな言ひ方は一昔か二昔前の教條主義者の言ひ草と瓜二つであり、ここには（たとひ批判を介してであれ）日本社會の現實に責任を取らうとする意欲はひとかけらもないといふべきであらう。

ドグマに盲ひた歴史家のやり方で日本の近代を斷罪することは、その病患に觸れたことには決してならないのである。

中村氏は明治大正期の文學的環境を論難して、「春水の讀者の方が、四迷の讀者よりも遙かに寛大な道德意識と成熟した性感覺と、小説形式を支える社交界ソシエテの生活人だった」のにくらべると維新後の知識層は偏狭であり、「小説家もひたすら自身の道德的潔癖を社會のなかで主張しようといふ傾向が強く、それは漱石においても、藤村においても、露骨に見られる」のだが、「英國ウィクトリア朝の小説や、フランス自然主義の社交界小説」は「社會と人間性の多様さ自體を愉し

む、という成熟」に達し、「モーパッサンやアナトール・フランスのサロン小説は、姦通そのものが主題であり、作者はそれを肯定し、讀者は作中人物たちの不倫を喜び追う」のであると述べた後、この話を、「日本の」知識層の精神的寡圍氣のなかでは、寛大で成熟した、多様な價值觀の併存する、愉しい社會の展望圖としての物語は、描かれるべくもなかった」と結論づけてゐる。

かういふ物の言ひ方から何ほどの正しさを引き出すことは出来るとしても、全體として見れば、この種の議論につきあふことは私にとつてほとんど苦痛である。なるほど明治の文明開化を評して、それは徳川の文明を捨てて非文明に就いたものであると言做すことは一つの見識であらう。しかし明治大正の知識層の偏狭さに見合ふ「道德的潔癖」の持主とされた漱石は『それから』といふ、事實上の姦通小説の作者であるし、藤村は『新生』といふ、姦通顔負けの近親相姦を題材にする小説を書いたのである。モーパッサンやアナトール・フランスが姦通を肯定したといふ箇所では、彼等において姦通は肯定する否定するの問題ではなかつたやうに思ふが、中村氏がこの「肯定」といふ言葉に持たせた意味の幅がよくわからないのでコメントは差控へることにしよう。が、「讀者は作中人物たちの不倫を喜び追う」といふ指摘には二重の問題が含まれてゐる。

社會に多様な價值觀が併存するのなら、何故、讀者はそのやうに一意的な反應をするのだらうか。そのことには假に目をつぶつて、中村氏の言ふ通りであると考へたとしても、カトリック道德の支配力の大きさが明治大正の日本の道德的強制力に優るとも劣らなかつた、十九世紀後半から二十世紀初頭のフランスで讀者はさういふ自由をどうして樂しむことが出来たのであらうか。

ここでは文學を成立させる場への考察が行はれてゐるやうに見えるが、実は不十分にしか行はれてゐないといふ印象を受ける。次の文に關してもそれと同じことが言へよう。「周圍の中産階級意識との戦いに敗れて自殺したのを目撃した芥川龍之介の弟子の堀辰雄は、若くして東京下町の環境から輕井澤のこの上流の國際環境へ文學の場を移すことによつて、西歐文學的意識の移植に成功することになる。」さういふことであるのなら、堀が東京の下町を捨てて輕井澤を選んだことは日本の現實からの逃避ではない、所以を中村氏は明らかにしなければならぬが、私達の最も知りたい、この根本的なところを氏は素通りした。

中村氏が現前させる一見華やかな文學の花園は眼を凝して眺めれば見かけほど美しくはないのである。

誤解を防ぐために私見を述べておくと、性のタブーが少しづつなくなつて行つたのは文學にとつて明らかに好ましいことだつた。しかし中村氏ほどの人がこのことを知らない筈はないのだが、タブーがなくなることはそれをめぐる問題がすべて解決したことを意味するものではない。明治大正の作家達が生き返つて目下の文學状況を見たら、彼等は現代作家が性のタブーに煩はされてゐないことを知つて羨むであらう。しかし一方では現代作家が周圍の社會からの抵抗が減退した、いはば空氣の稀薄な場所で仕事をしなければならぬことを察して、彼等に同情するかも知れないのである。

中村氏が、「日本文學史上、現代は室町のお伽草子の幼稚さの主流だつた時代に次ぐ、第二の低迷期ではなからうか」と慨嘆して、そこからの脱出を呼び掛けるのなら、その「低迷」の理由をもつと掘下げてもよかつたではないか。問題は折角戦後派が文體革命を始めたのに

第三の新人が散文を「傳統的な客觀的文體の洗煉への道」に戻してしまつたといふ——この指摘に何ほどの眞實が含まれてゐるとしても——ことで終りはしないのである。

また明治以降の日本社會に違和感を持つ中村氏がそれとの對比において近代西歐の社會を理想化してゐるのであれば、氏はその點では、氏がその偏狹さを攻撃する文明開化時代の日本人の心性を未だに引きずつてゐる、と言はざるを得ない。近代の西歐は今日尚、私達がそこから學ぶべきものではあるが、それは決して私達の規範ではない。國粹主義者よろしく日本を絶對視する必要はもとよりないけれど、彼等の社會についての考究を冷靜に、同時的に行ふことを通して、双方の美點と弱點を浮び上らせることが望ましいと思ふ。

『再讀日本近代文學』から著者の息づかひは傳はつて來るので、これは個性的な著作であるとは言へるが、私はその中に中村眞一郎といふ一人の現代人が悠々と生きる姿を感得するまでには至らなかつた。かう言ふとそれは中村氏が批判的な小林秀雄の方法、すなはち作品を作者の「人間」——氏は「人格」と書いてゐるが——に還元する方法であり、それは困ると氏から逆に言はれさうだが、何も小林がどうのかうのといふことではなく、一冊の本を読み終へた後、その本の著者の自在な姿を思ひ浮べたくなるのは讀者として自然なことではないだらうか。

實は私もこの本から様々な示唆を受けたのであるが、そのことよりも、中村氏における何物かの不在の方がずっと氣に掛る。

以上の苦言が中村氏の耳に届いたとしたところで、氏はその態度を改めてくれはしないであらう。さうすると私は最後まで中村氏に文句を言ひ續けるしかないが、それと同時に、氏から祕かに學ぶことも止

めないつもりである。これを先輩への禮儀に反した振舞と見做す考へ方を私は採らない。